小学校　特別活動　部会

部会長名　福智町立伊方小学校　校長　相緒　英樹
実践者名　川崎町立川崎小学校　教諭　友永　宗興

1　研究主題

◎子供たちが楽しく関わり合える自発的・自治的な学級活動（1）◎

▽～育ちを見とり指導に生かす「そのつど評価」の充実を通して～▽

2　主題設定の理由

在籍校は、通常の学級在籍児童数 235 名、特別支援学級在籍児童数 15 名、計 250 名からなる。本校の子供たちの様子は、明るく元気で活発な児童が多い反面、落ち着きのない子供が多く、トラブルになることがある。

本実践で紹介する４年生も同様な課題がみられる。本学級は、児童数 20 名からなる。本学級について、４月当初の担任による観察の記録や、前担任・生徒指導委員会からの報告から分かる学級の様子は、子供同士の関係がうまくいかずトラブルなどが原因でこじれている状況がみられた。

このような課題を解決するためには、子供たちが議題内容について話し合い、判断し、よりよい内容に決定するまでの一連の実践を行うことで、友達と楽しく関わる経験を積み上げていくことが重要になる。そのために、学級活動（１）の活動の各場面において、教師は子供たちのよりよい行動や態度の変容を正確にみとり、そのつど評価を繰り返し行うことで浸透していくと考える。また、その繰り返しの評価を積み上げていくことより、子供たちが自分たちで学級の人間関係をよりよくしていこうとする自発的・自治的な力を育むことができると考える。

3　主題・副主題の意味

（1）　子供たちが楽しく関わり合える自発的・自治的な学級活動（1）とは

学級活動（１）の内容において、問題発見から話合い、実践、振り返りの各過程を教師は可能な限り子供達に任せ、子供たちの手で楽しく関わり合える学級を作れるようにすることを目指す取組である。学習指導要領に示されているように、学級活動（１）はこのような子供たちの自発的・自治的な活動を特質として行われる。また、特別活動の基盤は「遊び」の活動であると片岡徳雄は述べているように、子供たちはお互いの関わりを深めていくために、学級活動（１）の初期の段階では「遊び」を充実させていこうとする。しかし、一部の子供たちが自分たちの関わりたい子供と自由に関わる「休み時間の遊び」とは異なり、学級活動（１）における「遊び」は、すべての学級の子供たちを対象として行われるものである。つまり子供たちは、仲の良い関係の友達以外の学級の子供たちとも楽しく関わることを体験的に学んでいく。そのような活動を積み上げていくことで、子供たちは人と関わる楽しさを学び、やがては困っている時には互いに助け合い、励まし合える学級集団へと成長していくと考える。この

ようにして一人一人が楽しく幸せな学級生活を送ることができる学級活動（1）の取組は、学習指導要領に示されているように学級経営の充実につなげることができる点でも大変価値のある取り組みであると考える。

（2）指導に生かす評価の一体化（見とりとそのつど評価）とは

学級活動（1）を自発的・自治的な活動にするためには、教師によるその場その場に応じた適切な評価が重要となる。学級活動（1）における各活動の終末に教師が評価・助言を行うことが緑本では示されている。ここでは、子供たちのよりよい発言や行動、態度を具体的に取り上げ、価値づけ、評価内容を子供たちに返すことが肝心である。しかし、評価場面は終末段階のみではなく、活動の途中においても行われるものであり、子供たちのよりよい発言や行動、態度を教師がみとった際には、そのつど取りあげ、価値づけをすることも重要になる。そのつど評価とは、このように指導と評価の一体化を図りながら、このような子供たちの発言、反応への見とりと価値付けを繰り返すことであり、このような評価の積み重ねが友達と楽しく関わる自発的・自治的な学級活動（1）の充実につながるものと考える。

以上（1）、（2）を踏まえ、本研究において目指す子供像を以下のように考える。

知識及び技能	自己の生活や集団をより良くするための方法を理解し、取り組むことができる
思考力・判断力・表現力	自己の生活の課題解決や集団生活の諸問題の解決に向けて考え、判断し、合意形成を図ることができる
学びに向かう力・人間性	自己の生活の課題解決や集団生活の諸問題に向けて主体的に働きかけることができる

4　研究の目標

学級活動（1）において指導と評価を一体化させた「そのつど評価」を充実させるには、教師が子供たちの現状や課題を正確にみとり、子供たちに必要な指導・助言を加え、そのことによって成長した子供たちの姿をその場で評価することが大切である。そのためには特に学級活動（1）を年間指導計画に沿って定期的に必ず実践し、子供たちが自分たちで「こんな学級にしたい」という願いをもち、みんなで話し合い、実践し振り返る活動を可能な限り子供に任せながら進めていく必要がある。そのような条件のもと、学級活動（1）における学級会での教師の指導と評価の一体化させた「そのつど評価」の在り方を究明する。

5　研究仮説

学級活動（1）を可能な限り子供に任せながら教師はそばで見守り、必要に応じて指導・助言したことに対して、子供たちが楽しく関わろうと意欲を発揮したことや、自発的自治的に取り組んだ行動について「そのつど評価」していけば、その経験の積み重ねが、自発的・自治的な活動へと発展するとともに、子供たちの手で楽しく関わり合える学級を作ることができるであろう。そして、子供たち一人一人もよりよく人

間関係をつくる方法や、学級という社会をよりよくするための社会参加の方法について、体験的に学ぶことができるであろう。

6　研究の計画

（1）【議題発見への関心・意欲を育てる】

子供たちは、学級の目標と自分たちの現状を比較し、今、学級に何が足りないのか？何が必要なのか？ということを分からなければならない。しかし、子どもたちの議題発見力は、学級活動経験値の差によって、大きく違いが生じる。そのため、学級活動の基本を発達段階に応じて指導し、理解させなければならない。それと同時に子供たちの内面に、そのことに目を向け、何とかしなければという積極的な関心や意欲を喚起させなければならない。

（2）【関心・意欲の芽を育てる】

上述のような実践的な関心や意欲を喚起するためには、日頃から学級の諸問題を意識できるように教師が意図的、積極的に子供たちへの働きかけを行い、子供たちの内面に関心・意欲の芽を育てなければならない。それと同時に、子供たち自らが議題を発見できるような後支えや仕かけ、そして教室環境も必要になる。これらの指導・助言を心がけ、学級の問題、私たちの問題としての議題が取り上げられ高く評価することで、議題発見への芽が育っていく。

（3）【解決の考え方】

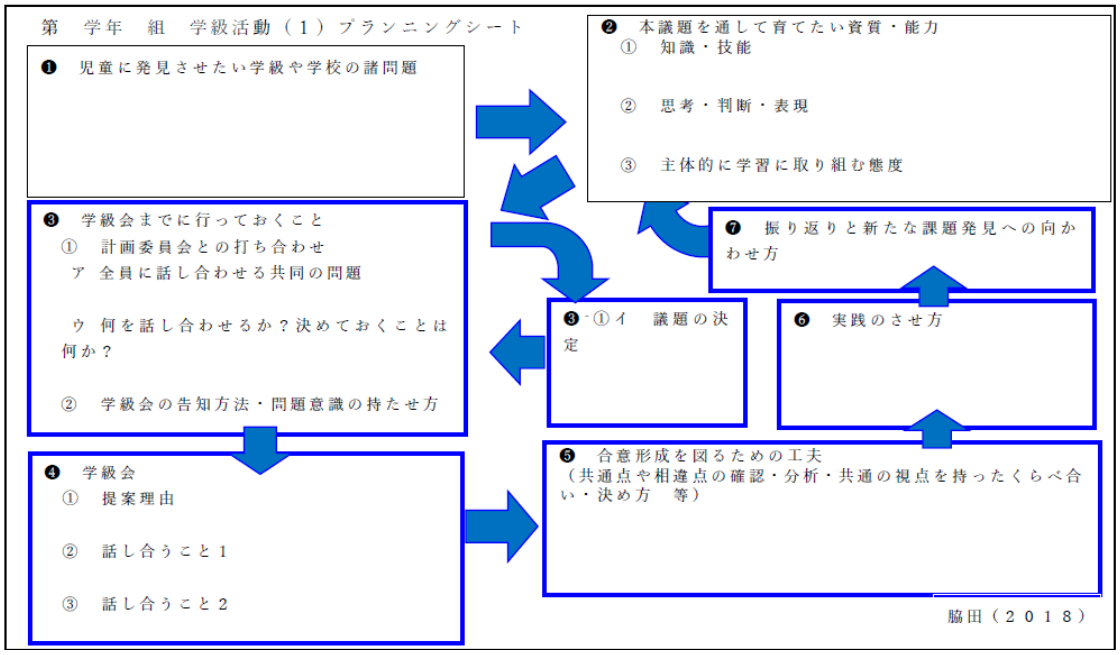
学級会での話合いの先にあるものは、算数的な明確な答えではなく、友だちの思いや考え方を伝え合いながら生まれる学級みんなでつくりあげるひとつの《考え》である。学級会では、マイナス方向の意見だけを出し続けても解決にもならない。友だちの考えを肯定的に捉え、プラス思考でよりよいものを作りあげようとする態度が大切である。そのことが結果的に折り合いをつけて話し合うことに繋がる。

（4）【決定のよりどころ】

学級みんなで決定していく場面で、よりどころとなるのは、学級みんなで作った学級目標であり、それに裏打ちされ、計画委員会でじっくりと話し合われた提案理由が大切になる。中でも、朝の会や帰りの会の中で、常に学級目標を意識しためあて作りや振り返りを指導しておくことが大切である。

（5）プランニングシートの活用

学級活動（1）の事前、本時、事後の一連の活動を実践として捉え、指導していくために、脇田哲郎（2018）のプランニングシートを活用し、実践を行う。なお、本プランニングシートは2023年度福岡県小学校特別研究大会で指導案として使用されたものである。



7　指導の実際

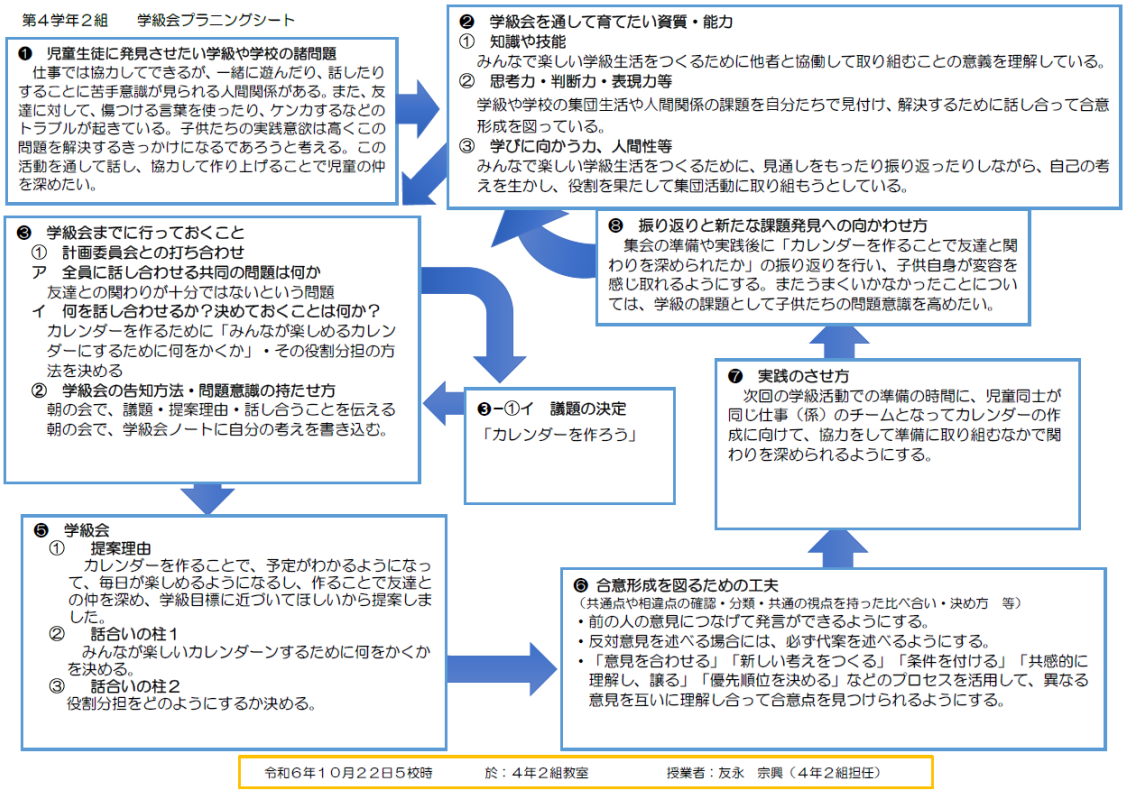
本学級の子供たちは、教師が「学級会したことある。」と聞くと、３年生でしたことがある子と一回もしたことがない子がいた。そこで教師は、第１回はしたことがある子供たちに学級会を進めてもらうことにした。実際にやってみると、意見を引き出すことやまとめ方が分かっておらず、教師が「一分間近くの人と話し合わせて」「今、この意見、賛成が多いから、これは決定していいよ」とほとんど指示を出して進んでいった。それから、意見が出ないときには「近くの人と話合う時間を取ること」「賛成意見がたくさん出ている物は決定しても良いか投げかけ決定していくこと」など、学級会を進めていく方法を助言しながら活動を積み上げていった。そして「今、自分たちで考えて話合う時間を一分間取ることができたね」とできたことをそのつど評価していった。

１学期には、「友達と関わることが楽しい、この学級は居心地が良い」と感じられる学級づくりを目指し、学級活動（１）の実践を積み上げていった。１学期の振り返りには「集会活動で友達と遊んで楽しかった」「またしたい」という声が多く聞かれるようになった。

第何回	議題
第一回	学級目標を決めよう
第二回	学級目標のデザインについて考えよう
第三回	七夕集会をしよう
第四回	係について考えよう
第五回	川小秋祭りに準備することを考えよう
第六回	カレンダーを作ろう

２学期にはさらにその質を高められるように実践の積み上げを行っていった。

以下は１０月２３日に行われた第六回学級会「カレンダーを作ろう」についての実践例について報告する。



（１）問題の発見・確認

これまでの学級活動（１）は子供たちが自分たちで学級の問題を見つめ、学級をよりよくするための議題について話し合ってきた。実践を積み重ねてきたことで、遊びを通して友達と関わることの楽しさやみんなで活動をすることの楽しさを感じた子供が増えてきた。また、「こんな活動をもっとしたい」という思いや願いを持つようになってきた。

本議題は、このような子供たちの思いや願いから生まれたものである。まず、教師が朝の会で「何か議題にしたいことはないか」となげかけたところ、子供から「カレンダーが作りたい」という声が上がった。教師は声が上がったことに対して「今、初めてこれしたいという思いが出てきたね。素敵だね」とそのつど評価し、「次は他の人からもでるといいな」と伝えた。そして、教師は子供たちに「カレンダーが作りたいことを議題にしてみるのはどうか」と投げかけると、子供たちは「やりましょう」といって議題として取り上げることにした。

その後、教師と計画委員会で準備を行っていった。本実践では、子供たちだけでは思いや願いを聞き学級の提案理由にすることが難しかったため、教師が見本を示した。教師が「どうしてカレンダーづくりをしたいのか」と聞くと、「カレンダーを作ることで予定がわかり、毎日の楽しみが増えること」というものであった。そこで、教師が「学校に来ることが楽しめるように作りたいんだね。良い考えだね」とそのつど評価した。その後、教師が「クラスとして、この活動をして、成長させたいことや

解決したいことはないかな」と投げかけ、提案した子供から「学級目標に近づきたい」という思いや願いを引き出した。この思いを参考に、7で示したプランニングシートを作成し、想定される学級会の構想をした。本来なら学級活動計画を作るべきであったが、本実践の子供の実態では、今までの積み上げがほとんどなく、時間がかかるため、省略した。その代わりとして、学級会シナリオを用意し、教師が進め方を教えた。そして、子供たちが話合いの進行の練習する際に、教師は見守り、その都度「意見が出ないときには、一分間近くの人と話し合う時間を取って良いよ」助言したり、「今、スムーズに進めることができたね。良かったよ」とそのつど評価したりして準備を進めていった。

計画委員会では、話合いの柱①「みんなが楽しめるようなカレンダーにするために何をかくか」という柱を立てた。そして、学級の子供たちが「みんなが楽しめる」という視点で、事前に案を考えられるように計画委員会全員で確認し、準備を行った。

（２）解決方法等の話合い・解決方法の決定

学級会の話合いでは、「季節を感じるものをかくといい」「行事を書いていくと予定がわかってワクワクする」など活発な意見が出されていった。しかし、その中で「学級目標にあるヒーローをかきたい」という意見に対し、「季節とは関係ないからヒーローはいらない」という意見が出され、賛成意見と反対意見が半分に分かれ、なかなか決めることができず、時間がきてしまい、もう一度話合いを行うことになった。次の話合いでは、それぞれの意見に対しての思いを聞き、話し合いを進めていったがなかなか折り合いをつけることができなかった。そこで教師の方から「このままでは、話合いが終わらないよね。どちらも納得する意見はないかな」と助言したが、子供から意見が出なかった。そこで教師が「たくさんヒーローをかくのではなく一体だけかくのはどうか」という助言をした。そうすると、反対していた子供が「一体だけならかいてもいい」と言い、賛成していた子供は「一体だけでもかけるならいい」という意見を出し、「カレンダーに一体だけヒーローをかく」ことで折り合いをつけ、話合いをまとめることができた。終末の先生のお話のところで「決めるのに時間がかかったけれども、賛成の人も反対の人も折り合いをつけることができたのがとてもよかった。」と教師が評価した。また、教師は「今回は先生の方から意見を出したけど、次はみんなからでるといいな」と次の目標を示した。子供たちは折り合いをつけることができたことで、この学級会の話合いに不満はなかった。カレンダーを作る活動を楽しみにすることができたように感じた。

（３）決めたことの実践

学級会が終わった後、数名の子供から「カレンダーはいつ作りますか」と聞かれることがあった。その際に教師は「カレンダーづくりに積極的だね。すばらしいね」とそのつど評価した。カレンダーづくりは、学級活動の一時間を使い、実践していった。学級活動の時間を使い取組を行うと、子供たちは活動にとても意欲的に取り組む姿が見られた。それぞれの班で、「１１月には〇〇をかいたらいいと思う」「〇〇のヒーローをかきたい」など子供たち同士で話し合いながら、作成に取り組んでいた。その際、ヒーローをたくさんかこうとしている子供には「学級会で一体までと決まったから」という理由をつけ注意することもできていた。その姿を見て、教師は「話合

いで決まったことを守ろうとしているね」とそのつど、評価した。子供たちは、登校して準備をした後や昼休みに「カレンダー作ってもいいですか。」と言って積極的に取り組む姿が見られた。教師が朝の会で「〇〇さんが登校して準備が終わっていた後に、カレンダーづくりをがんばっていました。素敵ですね」とそのつど、評価すると、隙間時間を見つけてカレンダーに取り組もうとする子供が増えた。

（４）振り返り

振り返り際に「学級会で話し合ってきた『ヒーローは一体まで』と決めたことで、二体目をかこうとした友達に「一体までだよ」と声をかけていたのが良かった。一生懸命取り組んでいる姿が良かったね」とそのつど評価した。子供たちからの振り返りには「また、今回のカレンダーみたいに友達と楽しめることをしたい。」「今度はもっとクラスが仲良くなるように、遊ぶ計画をしたい。」と意見が出された。子供たちが学級会を通して実践したことが学級をよりよいものにしていくものだと感じていた。

8　研究のまとめ

上記のような学級活動（１）の取組について２学期を通して進めてきた結果、楽しくかかわれた子供が増えてきた。普段の生活で、友達とトラブルを起こしていた子が活動の際には、トラブルなく協力して活動することができていた。このことは、普段折り合いをつけることができない子供たちが、学級会で折り合いをつける大切さを体験的に学んだからだと考えられる。また、同じ目標に向かって取り組んでいくと、メンバー同士が役割を果たす中で関係が良くなっていくという研究もあり、本実践にみられた子供の変容とも関わりが深いと考えられる。

また、自発的・自治的に取り組む姿も見られた。学級会後には、決まったことに対し、「いつ取り組むんですか。」と子供たちから聞かれたり、活動を朝の時間や休み時間にしたりするようになってきた。これは子供たちが学級活動（１）の実践を通し、自分たちでできるようになったことや活動に積極的取り組んでいる子供を教師が「そのつど評価」してきたことで、子供たちが自信を持ち、自発的・自治的に取り組むようになったと考えられる。

本実践の課題は、学級活動（１）取り組む前段階の教師の指導による規律ある生活づくりが不十分であったことである。２学期以降、学校のルールやトイレの使い方などの規律面の低下がみられた。このことが学級活動（１）の充実の妨げになってしまったために、効果が十分ではなかったと考える。

今後は、学級活動（１）を成立させるための教師の指導による規律ある生活づくりのあり方を究明していきたい。

9　成果と今後の課題

〇　学級活動（１）の実践を継続的に行い、子供たちから思いや願いが出て議題が決まったり、活動に対して積極的に行ったりしたことを教師がそのつど評価したことで、子供たちが自発的。自治的に活動に取り組むようになった。

〇　学級活動（１）では、子供たちが友達と関わり準備し、実践する中で子供同士が楽

しく関わり合った場面や協力して活動した場面を教師がそのつど評価したことで、子供たちが楽しみながら活動を進めていく姿が見られた。

- 学級活動（１）の中では、子供たちは友達と楽しく関わりながら、協力して実践に取り組むことができていたが、休み時間やその他の授業ではケンカが起きたり、トラブルになってしまったりしたことが多くあったため、学級活動（１）の実践を通して身に付けた友達との関わり方を普段の生活や授業に生かしていくための方法を究明していきたい。
- 学級活動（１）に自治的・自発的に取り組むようになった子供もいるが、活動に消極的な子供もいるので、消極的な子供が活動に自発的・自治的に取り組むための教師の関わりや評価の仕方について究明していきたい。

◎　主な参考文献

○　文部科学省　2014　「楽しく豊かな学級・学校生活を作る特別活動　小学校編」

○　杉田　洋　2021　「特別活動で学校が変わる！Society5.0 時代に生きる“協働”する力の育成」

○　片岡徳雄　1990　「特別活動論」